

Title	ゴンクール兄弟『ジェルヴェゼ夫人』(第十～十二章)(翻訳)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt, Madame Gervaisais (chapitres X-XII), (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.77 (2023. 10) ,p.118 (9)- 126 (1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20231031-0118">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20231031-0118</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## ゴンクール兄弟『ジェルヴェゼ夫人』

(第十～十二章) (翻訳)

山本武男

訳者まえがき

『ジェルヴェゼ夫人』(一八六九年刊)は、近代生活に於ける信仰の危機を描いた作品である。近代社会の個人主義的思潮の中で、宗教は如何に実践され得るか。『ルネ・モプラン』(一八六四年刊)によって、フランス十九世紀前半から半ばに掛けての時期のブルジョワ核家族が持つ脆弱さを暴いて見せたゴンクール兄弟は、『ジェルヴェゼ夫人』では信仰実践の方法に迷う十九世紀パリの貴婦人の、ローマに於ける宗教的彷徨を焙り出した。今回は、主人公の婦人の読書傾向、生い立ちに関わる哲学的趣味、そしてローマの街中に於けるカトリックの派手な宗教行列に違和感を覚える彼女の内向性が描かれる。この婦人が持つ独特な思索癖は、後の宗教の名の下に彼女が嵌り込む陥穽への伏線を成している。

## 十

ジェルヴェゼ夫人の生活は、絶えず何かをやり乍ら、閉じ籠りがちに続いていた。昼も夜も長く感じられ、それを忘却するのが読書の機会であり、ソファに、屢々数時間坐った儘、途中立つ事もなく読み耽り、その内容のメモを取り、気も漫ろ乍らも緊迫した思索に没入し、その間、時々自身の長い指で、黒髪からずれ落ち掛けた硬いヘアバンドを一寸持ち上げたりした。

こんな時には、夫人特有の美しさ、只の女性美を超えた性格と趣味を反映した美しさが何時になく際立った。後光の様に纏め上げられた大きく平らな髪、艶やかに張り出した額、隈の影の中で遠くにあるかの様に感じられる瞳、病気がちゆえ三十七歳にして若々しい細さやや茶色味さえ帯びた青白い肌をした繊細な目鼻立ち、それらの所為でジェルヴェゼ夫人には、深みがあつて魅惑的、故に記憶に残る特別な人が持つ、思考は殆ど地上から遊離し掛かつていてその顔はもはや精神の現れそのものであるかの様な穢れなき生者が持つ、人を惹き付ける、奇妙な魅力があつた。更にまた彼女の特徴としては、首が長く、肩幅は狭く、胸は小さく、ふわふわと包み込む生地の中に上半身は埋没し、女性であることを感じさせない程までに、殆ど天使の様に瘦せていて、体の線は鋭角的であり、それらの事が更にその浮世離れした外観に、夫人の存在の全体にこの世のものとは思えない姿形を与える何かを加えていた。

四本の黄色い絹の飾り紐で壁に留めてある、輻輳細工の小さな板棚の上には、夫人の手の届く辺りに、デュガルド・スチュワート、カント、ジユフロワとこんな重みのある名前が書かれたお気に入りの本が置かれていた。

ルイ・フィリップの治世には、ブルジョワ女性に一寸したエリートがいて、何某かの知的趣味を有していたが、彼女ら殆ど全てに共通していたのは、小規模のサロンの短い回顧録か、時には友人らに読み直させる為のささやかな数頁を残した丈だということである。

ジェルヴェゼ夫人は、今日では殆ど姿を消してしまったこの種の女性の实例にして典型であった。彼女の生来誠実な知性は、成長と共に生真面目な勉学の方へと導かれて行つた。幼い時分に母親を亡くし、老人に育てられた彼女は、その幼少期に就いては、オペラ座付近のパサージュのとある古くて薄暗い読書室を除いては、殆ど思ひ出すことがなかつたが、そこには彼女の父親が新聞を読みに通つており、父親が夕食の時間までする散歩の間も、願いを聞き入れて貰い、そこに留まる許可を得ていた。入口のすぐ向こうで呼び掛けて来る陽の光から離れ、新聞、雑誌の沈鬱な常連の読者の間に身を隠し、古い蔵書の罪のない書物の読書に紛れ込み、のめり込む、薔薇色がかつた白い肌の少女の幸福な時間だった。彼女が唯一手にするお人形はこれら、つまりこの読書室の書物たちだったのである。

少女のなかでは、音楽と絵画がやって来て読書に加わり、既にすっかり内向的になり、世間と没交渉の生活の孤独な時間を満たした。

そんな彼女は、父親の厳格な人柄のもと、禁欲的な環境で育ち、同じ境遇を生きて来た仲間であるその古くからの政治友達らが毎晩、炉端に持ち寄る思ひ出話の古風な響きを耳にし乍ら大きくなった。思春期にはもう、家の中で喧しく交わされる十八世紀の制度たる男性優位論的思想と自由な道德規範に就いての講話に自身の周囲で

触れつつ、——形成期にあった彼女の精神は、理解するのが容易な本を読む浮薄な喜びと空疎な暇つぶしに飽き足らなくなり、努力を要し、沈思を齎す書物へ、歴史書、科学書、哲学書へ、この世が存在する事の謎の前に屹立する至上の問いを理性に投げ掛けて来るそれらの書物へと向かった。

彼女に自分自身とは何かの問いを突き付けて来たのは、特に哲学書だった。彼女はそこで、プラトンの言葉を頼りに、不確かな生活風景、絶えず移ろう自然から、変化せざるもの、不変で絶対的かつ永続的な真実、イデアへと向かう限らない自身の向上心を見出した。高尚にして圧倒的な関心が彼女の心を捉え、知能の秘められた働きを探求し、頭や心の覆い隠された内奥を垣間見ようと努め、自分の知性を知る為に人知全体を研究対象となす方向へと彼女を後押しした。注意力を外界へと向けて、そこにある対象の周辺を巡らせる大抵の男や女とは異なり、彼女はこの分析に対して、独特な天賦の才、自身の思考を追跡するのが習慣化した限りなく繊細な個人的感覚による知覚作用や、手当たり次第の印象、知的作業、確固たる決意、日常よくある意識の移ろいの悉くを用いていた。

深淵なる研究。内部に奥深く入り込み、掻き回し、屢々何も聞こえぬ静寂<sup>しじま</sup>、時々何も見えなくなる闇の中、孤独に徹して目に見えず、且不可知な自身の内奥を掘り下げ、己の「自我」<sup>モ</sup>の日常の現象たる自身の感性の動きを探ることに努め、彼女は人並外れて内向する力を身に着けて行つた。徐々に他の人には感じられないことも感じられるように努めていた。そして大多数の無分別な生者には閉ざされた儘であり、科学それ自体にとつてもまだ極めて謎の多い、漠然としたこの世界に相對峙する彼女に齎された「見者」<sup>ワライヤト</sup>の明敏さとも言うべきものによつて、時々、遙か彼方に、広大な覆いの裂け目を通して、何時か人知のあらゆる謎に光を投げ掛けるに違いない晴れ間を目にする様になっていた。

こうした極めて圧倒的な心理の問題を探究して行く只中で、彼女を手招きし、導いたのは、近代知のあの二人

の巨匠、即ちスコットランド学派の著名な創始者であり、在来の学派の類推に基づいて仮説を立てる方法に對立する、リードとデユガルド・スチュワートであつた。ロックの懷疑論、コンデイヤツクの唯物論を一通り読み終えた後には、彼女はこれら二人の哲學者に對し、彼らのお陰で、息苦しさから解放され、彼らのお陰で、リードが人類にその尊嚴の感情を回復させ、人間の能力と優秀さに道徳と形而上学の基礎を置いた「良心」の高みにも似た、あれらの澄んだ頂で呼吸出来たことに、感謝の念を抱いていた。そしてリードへの崇拜を、「義務」を人類の榮譽にして自身の哲学の要と捉え、その無私無欲の立派な原則から自由を生み出した、彼女にとっては神の如き人たるカントへの崇拜に結び付けていた。

という訳で、ジェルヴェゼ夫人は一個の女流哲學者と言えた。が、全く以て女であることを棄てていない哲學者なのである。女らしさという点では、人を喜ばせたいという感じの良い欲求は保つた儘でいたし、少々愛情を帯びる友情を自身の周りの人々に自然と抱かせる、女性特有の皆に向けての媚びの感覺すらも持ち合わせ続けていた。彼女は女としての優美さ、上品さ、その移り氣をさえも仄かに補う品々と共に生活することが好きであつた。彼女にとつては、他の女性と変わらずドレスはドレスであり、アクセサリーはアクセサリーなのだった。氣が向くと陽気で笑い上戸となる為、その嚴肅な知性の下には、子供らしさ、少女らしさを秘めているかの様にも見えた。が大抵の場合、彼女は悪戯いたずらっぽい思い付きで鎧よろいい、逆説を弄することで韜晦を図り、誰に對しても「青踏派」ブルーストッキング、また思索家を以て自らを任じて見せていたのであつた。

## 十二

尤も、その人生の始めから、重荷を背負わされた格好で、彼女は心身共に成長した。

彼女の母親は、八歳年下の弟を出産した際、命を落としていた。大変幼くして彼女は、弟の子守り女、幼き母となつた。その後、この弟が成長し始めると、その勉強好きな少女の脳裏には、弟の教育を担う女教師となり、この生まれたての知性を、女の授業特有の巧みな話術、穏やかな仄めかし、愛情深い威厳と共に育み、形作るうとする野心が既に芽生えていた。この長男たる弟の中に、自分が彼を基に拵しらえた理想像を実現し、やがてその内面に自分の思想と一致する、共感出来る姉妹思想とでも言うべきものを見出し度いと夢見ていたのであつた。だから彼女は彼の学習の手助けに心底誇りを以て没頭していた。弟の寄宿学校進学も、この指導の妨げにはならなかつた。外出日だけでは、姉と弟が思考を遣り取りし、表明し合い、一致させたりするには時間が足りなかつた。週に二三通、休み時間や夕食後の団欒の間に書かれた手紙が、姉の意見を求めるべく届いたものだが、それは彼の就学状況全般を把握しつつ寄宿学校生たる弟の個人授業を毎年並行して準備し、その授業、宿題、作文の忍耐強い復習教師を彼女が自ら以て任じていたからであつた。

少年の内面に於いて、初聖体拝領は忘れ去られ、子供の信仰が初めて出会ふ疑念と葛藤し始める不安な、危機的な時が訪れたときのことである。弟はその魂を、彼にとつては姉以上の存在たる、母の如き、友の如き、聴罪司祭の如きこの姉に晒したのだつた。こちらから呼び水を打つことなくして、突然差し向けられたこれらの告白に、少女は、人間キリストに対する女性らしい敬意を払いつつも、超自然的なものを完全に排して纏めた自身の長きに渡る学習の覚書や研究を伝え乍ら、率直に答えた。続けて彼女は彼に、「真」、「善」、「美」を崇める将来の思想に向かう筋道に沿い、自由な思考の指標として、要約や分析を点在させ、理解し易くした読書や哲学研究の「計画」の概略を示した。

その時から既に、それは姉から弟へ、師から弟子への頻繁な遣り取りであり、彼ら二人の自由な精神の殆ど中断されることのない、全ての存在、全ての因果の唯一の源である「卓越した実在」である「無限なるもの」に就

いての、打ち解けて交される対話だった。独創的な閑談は、まずエコール・ポリテクニクの勉強部屋とエルデル街の真新しいカーテンの下がった小部屋の間で交わされていた。その後は、トゥーグルトから二十里離れた、サハラ・アラブのフランス最新の野営地があるオアシス、エル・ハジラと、結婚したパリの女の閨房との間で。現在では、ローマから、ジェルヴェゼ夫人の弟がクリミア遠征の次に、砲兵隊の中佐に任命され派遣された許りのオランへの船上で出会うのである。

ジェルヴェゼ夫人は、ローマから以下の様な文面を、その弟に寄せた。

「(……) コルソ通りを通つての馬車での帰路の事でした。それは、私が当地に着して僅か数日後の事でした。窓という窓、バルコニーというバルコニーに金の刺繍が施された赤い染め物、邸宅の正面に掲げられた古いタピストリー、何かを待ち受けているらしい通りの沢山の人々を目にして私は驚きました。「礼拝行進です！」と御者が私に言いました。そして彼はトラヤヌス広場に面して、その脇に馬車を駐車しました。そこから私は眺める事にしたのですが……分列行進の全体像を思い出しますので、一寸お時間を頂戴致しますが、まずは銃剣隊……神に先立ち軍隊ここにあり、と云つたところ。続いて白日の下の炎の輝き、次に青い短いマントを羽織つた白装束の改悛者たちの二つの列の間を進んで行く、キリストの顔の表面に血の雫がばたばたと滴る図柄の刺繍が施された大きな、実に大きな幟、更に紋章の入った飾り紐と着飾つた執事と、蠟燭を手にした黒装束の司祭たちの絶えざる列に挟まれた他の幾つかの幟。その後には、汗をかきつつ愚痴を零している筋骨隆々たる男が自らの腹を支えとして重心を保ちながら擱んでいる、動物園の熊の掘り下げ式動物舎の巨木を思わせる、節のある巨大な十字架。移動天蓋の下、金と絹を身に纏つた高位聖職者の間での、天使の服装をした一人の子供が撒香する聖餐式。最後に、殿を務めるのは、式典の大きなデコレーションキーを思わせる、礼拝室丸ごとと云つた感じの、七本の剣で貫かれた金属製の心臓輝く祭壇で、——その山車は綱と十六人の男の肩——彼らが十六人



いることを私は教えた——によって何うにか支えられ、保たれていた。そうして、長く、ゆつくりと進む礼拝行進の全ての留<sup>りゅう</sup>での音楽！それがあなたに伝わるなら！十字架に対して、大太鼓が音頭を取る、丸でもう、お祭り風、軍楽風、朝方<sup>オバ</sup>の曲風<sup>ド</sup>の音楽！そうして、あの魂の籠った庶民たちの熱狂的な陶醉、叫び声、信心、総じて感嘆の念がその後が続くのです！これら全ての事どもを、あなたに何う告げれば良いのでしょうか。あなたの姉のものとは違う筆致を必要としましょう……。

あなたなら屹度、この拍子抜けするほど騒々しい、熱烈な喝采を前にお笑いになったことでしょう。私の方とは言えば、理由は分かりませんが、笑うことはありませんでした。あれらが進んで行くに従って、嫌悪感に似た悲しい気持ち私が私を捉え、胸を締め付けられたのです。神に関して私たちが抱いて来たお姿は、凡そあの様な物ではないですよ、でしょ、あなた。ですが、とは言え、これが文明の生んだ信仰なのだ、と感じていたのです。そうです、私が目にしていたものは、ジャガンナータの偶像の元に押し掛ける群衆をやや彷彿とさせる、野蛮で酷く粗暴な東洋の偶像崇拜を出ないものでした。あの外面性やあの大雑把な具象性によって、また極端に人間臭い象徴性によって、私という存在の最も深い部分が、動揺し、傷付けられ、辱められたと感じたのです。奇妙に混乱した、が真つ直ぐに胸を突き刺された様な印象でした、本当ですよ。日常的には遠のいていたものの、決してそれが凌辱される様を見度<sup>た</sup>いなどと決して望んだ事のない信仰への、冒瀆とまで私の目には映ったあの儀式の墮落の破廉恥さには、胸苦しさを感じました。私の前で起こっていた事、そして私の関心を惹き付ける事などありえず、もしくは単に好奇心をそそったに過ぎないと言い切れそうな出来事は、私に苦々しい思いをさせはしましたが、その苦痛の真の原因を明確に把握するには至ってはいけません。その事を考え乍ら、私は今、気高く、鋭敏で、慎み深い感情を持つが故に傷付くのであるし、如何なる高雅な知性も、神と人間との関係を考へるところから生じるのだと思うのです。結局、それが何であったにしても、人通りのないコルソ通りを通つて

帰路に就きつつ、このことに就いて沢山考えを巡らし、この国に於いては——そして恐らく他の多くの国でも——実に限らない物質性、うんざりする程の見世物、これ見よがしの程度の低い写実性、男たちの筋肉を使った夥しい骨折りが、宗教と呼ばれるものには必要なのだろうかと自問していたものでした！

.....

時々、カトリック系の新聞を手に取り、目を落としています。ここでは、私たち人間がぞんざいに扱われています。先日はその紙面で、自由思想家や哲学者たちが、人類の始祖はオランウータンだとしているとの記事を読みました……」

(つづく)

翻訳は、以下に拠った。Edmond et Jules de Goncourt, *Madame Gervaisais*, Gallimard, coll. Folio, 1982, p. 92-100.